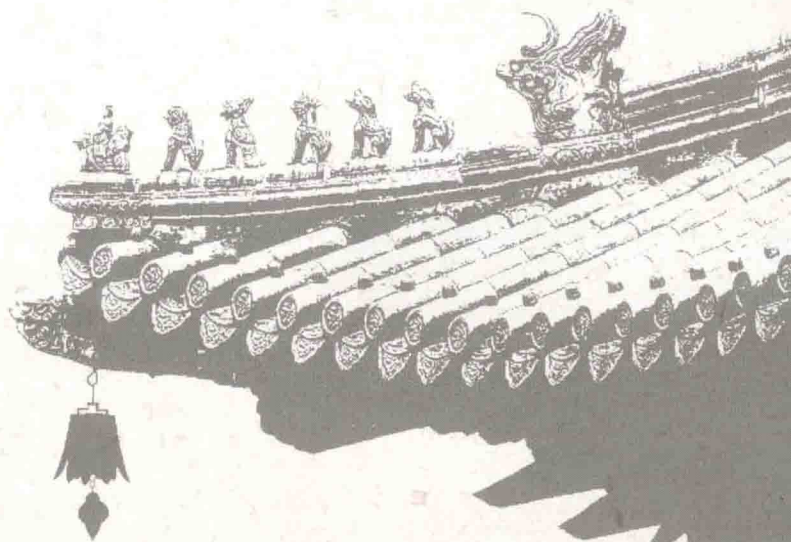



汉日对照

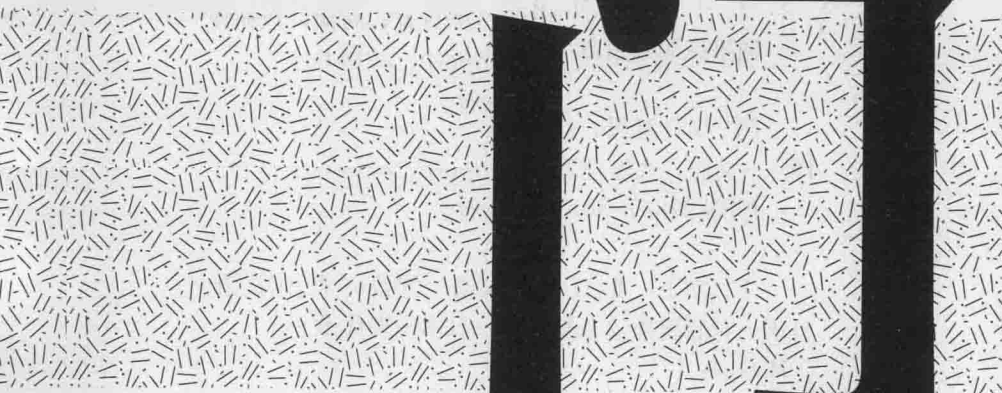
明治文坛泰斗夏目漱石倍受关注之作

# 间

(日)夏目漱石 著  
高 镛 钱剑锋 译



 大连理工大学出版社



(日)夏目漱石 著  
高 镗 钱剑锋 译

## 图书在版编目(CIP)数据

门: 汉日对照 / (日) 夏目漱石著; 高楠, 钱剑锋译. —大连: 大连理工大学出版社, 2014.6  
ISBN 978-7-5611-9156-9

I. ①门… II. ①夏… ②高… ③钱… III. ①汉语—日语—对照读物 ②长篇小说—日本—现代 IV. ①H369.4: I

中国版本图书馆CIP数据核字(2014)第103068号

大连理工大学出版社出版

地址: 大连市软件园路 80 号 邮政编码: 116023

发行: 0411-84708842 邮购: 0411-84708943 传真: 0411-84701466

E-mail: dutp@dutp.cn URL: <http://www.dutp.cn>

大连力佳印务有限公司印刷

大连理工大学出版社发行

---

幅面尺寸: 145 mm × 210 mm 印张: 15.75 字数: 350 千字  
印数: 1~4000

2014年6月第1版

2014年6月第1次印刷

---

责任编辑: 海迎新

责任校对: 邓颖

封面设计: 董振巍

---

ISBN 978-7-5611-9156-9

定价: 32.80 元

## 译者前言

夏目漱石(1867-1916)，本名金之助，生于江户一个町名主家庭，其一生经历了完整的明治时期(1868-1912)。

明治初期，日本社会吸收了很多西方的制度、知识、技术。在文学、美术、音乐等艺术方面和科学方面都深受欧美影响，出现大量的油画、西洋音乐、外国文学译本。受欧美文学影响，日本文坛也出现写实主义、浪漫主义、自然主义等文学潮流。明治后期，日本文坛盛行自然主义，夏目漱石反对自白式的流于描写丑恶现实的自然主义写法，他主张要留有余地刻画写作对象。所以有人称其为“余裕派”。

夏目漱石在日本近代文学舞台上可以说是第一主角。在日本近代文学史上被称为文豪的只有夏目漱石和森鸥外两人。到目前为止，日本文学评论界关于夏目漱石的评论专著和评论文章的数量都是其他作家无以匹敌的。夏目漱石之于日本，如同鲁迅之于中国一样，具有特殊的意义和地位。

夏目漱石生活在时代变迁的前沿，经济秩序、政治制度、文化观念等一切都在变化中。同样，文学方面处于汉文学衰退，欧美系文学涌进的阶段。夏目漱石作为使用国家提供的资金留学归来的学者、浸润过汉学思想与文化的有儒家

观念的读书人，在这个时代交替之际，不可避免地产生了对自身的期待、对社会的责任感。所以，他思考社会变化的利弊、社会的走向、在这样的环境下世人应怎样应对的问题。

夏目漱石不仅是小说家、俳句诗人、汉诗诗人，同时也是一位英文文学研究者。夏目漱石与其他作家的最大区别在于：阅读他的作品时，人们被吸引的往往不是其作品的文学性而是里面包含的思想。评价夏目漱石的关键词“则天去私”、“自我本位”和“明治精神”都是更侧重于思想方面的评价，只是也适用于文学而已。可以说，夏目漱石是伟大的文学工作者，更是一个伟大的思想者。

时代在变迁、文化思潮在改变，阅读夏目漱石作品的主体也在一代一代地更新。读者、文学评论者总能不断地在他的作品中发现新东西，这些不断涌现的新发现正是夏目漱石经久不衰的原因之一。

《门》在夏目漱石的几部小说中不是第一部，也不是最后一部，却倍受关注。著名评论家吉本隆明曾说，《门》是夏目漱石小说中他最爱读的一部作品。

《门》发表于1910年3月至6月，是夏目漱石前期三部曲《三四郎》、《从此之后》、《门》中的最后一部。主人公宗助大学期间和与朋友同居的女人发生恋情并走到一起，之后退学，过着远离社会的生活。有人说，《门》是《从此以后》的续篇，因为后者的主人公代助和朋友的妻子想私奔，却没能成行。《门》写的则是主人公宗助和好友的“妻子”一起生活之后的故事。

和夏目漱石的其他几部连载小说一样，《门》对当时的风情有大量描写，有时可以通过它对当时那个日新月异的时代，有一个感性的认识。比如电车中看到的煤气炉的广告、小孩子的游戏，等等，处处体现了明治时期的特点，几部作品加起来构成了一幅明治时期的“清明上河图”。这部作品中还随处可见对比手法的运用。宗助和坂井，一个是每天早出晚归的低级机关职员，一个是生活无忧、时间充裕且颇有闲情雅致的人；一个家在阳光普照的崖上，一个家在阴暗的崖脚之下；一个广交朋友，一个躲着人群；一个积极乐观，一个消极不思进取；一个孩子成群，一个无嗣却极其渴望养育孩子。如果宗助没有和朋友的同居对象结合，那么宗助也会顺理成章地成为坂井这样的人，所以坂井与宗助的对比也是宗助的两种生活的对比。宗助去京都上学后，第一次回家时，父亲还依然硬朗，自己夺了朋友之“妻”后，短短的时间内父亲竟然去世了；在小说的开头处，外面的广阔世界与自己所处的狭小世界的对比；第一章中外面的阳光与室内的阴暗的对比，等等。夏目漱石从未明言主题，但这些随处可见的对比，却能给读者以潜移默化的影响，一遍一遍地强化主题，令读者在不知不觉中为主人公的命运所震撼。文中多次出现的妙笔生花的景物、环境的描写，亦有异曲同工之妙。

另外，《门》中出现的三角关系，即与好友或者兄弟同时喜欢上同一个女人的故事。在夏目漱石的作品中至少有四部，被坏叔叔剥夺财产的事件也屡屡出现，这也是一个很有

趣的现象。

在这部作品的翻译过程中，译者本人也跟随着这位伟大文豪的笔触，仿佛游走于那个时代，仿佛就是那个时代中的一分子。为宗助的命运唏嘘，为阿米平静、无争的性格所感染，被叔叔、婶婶的无耻激怒，体味着宗助与阿米的自责与无助。

借此翻译的机会，细细品读了夏目漱石的这部小说，发现夏目漱石的语言表达特立独行，常用一些常人不用表达方式，既引发深思，又凸显文学效果。细品之下方知作者处处用心良苦，字字句句藏有玄机，明白《门》这部作品，不是一次就能读懂的，当然也激发了我细读一下其他作品的欲望。我和钱老师翻译的时候，争取最大限度地传递原文的面貌，期望各位读者也能体会到这种快乐。

最后，在本书即将付梓出版之际，我想借此机会感谢大连理工大学出版社相关工作人员的辛勤劳动，尤其是海迎新编辑给予我很多的帮助，处处体现了一个出版界人士的专业水平。另外衷心感谢翻译理论基础雄厚的钱剑锋老师的合作，文学造诣颇深的日本人教师住岳夫老师的指点，林少华老师和曹亚辉老师的引荐，你们中的任何一位都是今天的出版不可或缺的因素。

高 颖

2014年5月

# 門

そうすけ さつき えんがわ ざぶどん  
宗助は先刻から縁側へ坐蒲団を持ち出して、日当りの好さ  
そうな所へ気楽に胡坐あぐらをかいて見たが、やがて手に持って  
いる雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になった。秋日和あきびより  
と名のつくほどの上天気なので、往来を行く人の下駄げたの響  
が、静かな町だけに、朗らかに聞えて来る。肱枕ひじまくらをして軒  
から上を見上げると、奇麗きれいな空が一面あおに蒼く澄んでいる。  
その空が自分の寝ている縁側の、窮屈な寸法くらに較べて見る  
と、非常に広大である。たまの日曜にこうして緩ゆつくり空を  
見るだけでもだいぶ違うなと思いながら、眉まゆを寄せて、ぎ  
らぎらする目をしばらく見つめていたが、眩まぼしくなったの  
で、今度はぐるりと寝返りをして障子しょうじの方を向いた。障子  
の中では細君しごとが裁縫さいほうをしている。

「おい、好い天気だな」と話しかけた。細君は、



「ええ」と云ったなりであった。宗助も別に話がしたい訳でもなかったと見えて、それなり黙ってしまった。しばらくすると今度は細君の方から、

「ちっと散歩でもしていられっしやい」と云った。しかしその時は宗助がただうんと云う<sup>なまへんじ</sup>生返事を返しただけであった。

二三分して、細君は障子の<sup>しょうじ</sup>硝子の<sup>ガラス</sup>所へ顔を寄せて、縁側に寝ている夫の姿を<sup>のぞ</sup>覗いて見た。夫はどう云う<sup>りょうけん りょうびぎ</sup>了見か両膝を曲げて<sup>えび</sup>海老のように窮屈になっている。そうして両手を組み合わせて、その中へ黒い頭を突っ込んでいるから、<sup>ひじ</sup>脇に<sup>はさ</sup>挟まれて顔がちっとも見えない。

「あなたそんな所へ寝ると風邪引いてよ」と細君が注意した。細君の言葉は東京のような、東京でないような、現代の女学生に共通な一種の調子を持っている。

宗助は両脇の中で大きな眼をぱちぱちさせながら、

「寝やせん、大丈夫だ」と小声で答えた。

それからまた静かになった。外を通る<sup>ゴムぐるま</sup>護護車のベルの音が二三次鳴った<sup>あと</sup>後から、遠くで<sup>と</sup>鶏の時音をつくる声<sup>とき</sup>が聞えた。宗助は仕立おろしの<sup>しょうせきおり</sup>紡績織の背中へ、自然と<sup>じねん</sup>浸み込んで来る<sup>あたたかみ</sup>光線の<sup>シャツ</sup>暖味を、<sup>むさ</sup>襦衣の下で<sup>あじわ</sup>食べるほど味いながら、表の音を<sup>き</sup>聴くともなく聴いていたが、急に思い出したように、障子越しの細君を呼んで、

「御米、<sup>およね きんらい きん</sup>近來の近の字はどう書いたっけね」と尋ねた。細君は別に呆れた様子もなく、若い女に特有なけたたましい笑声も立てず、

「<sup>おうみ</sup>近江のおうの字じゃなくって」と答えた。

「その<sup>おうみ</sup>近江のおうの字が分らないんだ」

細君は立て切った障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い<sup>ものさし</sup>物指を出して、その先で近の字を縁側へ書いて見せて、

「こうでしょう」と云ったぎり、物指の先を、字の留った所へ置いたなり、澄み渡った空を一しきり<sup>なが</sup>眺め入った。宗助は細君の顔も見ずに、

「やっぱりそうか」と云ったが、<sup>じょうだん</sup>冗談でもなかったと見えて、別に笑もしなかった。細君も近の字はまるで気にならない様子で、

「本当に好い御天気だわね」と<sup>なか ひと こと</sup>半ば独り言のように云いながら、障子を開けたまま<sup>しごと</sup>また裁縫を始めた。すると宗助は肱で挟んだ頭を少し<sup>もた</sup>擡げて、

「どうも字と云うものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。

「なぜ」

「なぜって、いくら<sup>やさし</sup>容易い字でも、こりゃ変だと思って疑り出すと分らなくなる。この間も<sup>こんにち</sup>今日の<sup>こん</sup>今の字で大変迷っ

た。紙の上へちゃんと書いて見て、じっと眺めていると、何だか違ったような気がする。しまいには見れば見るほど今らしくなくなって来る。——御前おまいそんな事を経験した事はないかい」

「まさか」

「おれだけかな」と宗助は頭へ手を当てた。

「あなたどうかしていらっしゃるのよ」

「やっぱり神経衰弱のせいかも知れない」

「そうよ」と細君は夫の顔を見た。夫はようやく立ち上った。

針箱いとくずと糸屑またの上を飛び越すように跨いで、茶の間の襖ふすまを開けると、すぐ座敷である。南が玄関で塞がれているので、突き当りの障子が、日向から急に這入って来た眸ひとみには、うそ寒く映った。そこを開けると、廂ひさしに逼るような勾配せまの崖こうばいが、縁鼻えんばなから聳そびえているので、朝の内は当って然るべきはずの日も容易に影を落さない。崖には草が生えている。下からして一側ひとかわも石で畳んでないから、いつ壊れるか分からない虞おそれがあるのだけれども、不思議にまだ壊れた事がないようで、そのためか家主やぬしも長い間昔のままにして放ってある。もともと元は一面の竹藪たけやぶだったとかで、それを切り開く時に根だけは掘り返さずに土堤どての中に埋めて置いたから、地じは存外しま緊っていますからねと、町内に二十年も住んでいる八百

屋の爺おやじが勝手口でわざわざ説明してくれた事がある。その時宗助はだって根が残っていれば、また竹が生えて藪になりそうなものじゃないかと聞き返して見た。すると爺は、それがね、ああ切り開かれて見ると、そううま甘く行くもんじゃありませんよ。しかし崖だけは大丈夫です。どんな事があつたって壊くえっこはねえんだからと、あたかも自分のものを弁護でもするように力りきんで帰って行った。

崖は秋に入っても別に色づく様子もない。ただ青い草の匂においが褪きめて、不揃ぶそろにもじゃもじゃするばかりである。薄すすきだのつた鳥つただのと云う洒落しゃれたものに至ってはさらに見当らない。その代り昔なごの名残なごりの孟宗もうそうが中途に二本、上の方に三本ほどすっくりと立っている。それが多少黄に染まって、幹に日の射さすときなぞは、軒から首を出すと、土手の上に秋の暖味あたたかみを眺ながめられるような心持がする。宗助は朝出て四時過に帰る男だから、日の詰つまるこの頃は、滅多めったに崖のぞの上を覗く暇ひまを有もたなかつた。暗い便所から出て、手水鉢ちようずばちの水を手てに受けながら、ふとひさし廂の外を見上げた時、始めて竹の事を思い出した。幹いの頂ただきに濃こまかな葉が集まって、まるで坊主ぼうず頭あたまのように見える。それが秋の日に酔って重く下を向いて、寂ひっそりと重なった葉が一枚も動かない。

宗助は障子たを閉ためて座敷へ帰って、机の前へ坐った。座

敷とは云いながら客を通すからそう名づけるまでで、実は書斎とか居間とか云う方が穩当である。北側に床があるの  
で、申訳のために変な軸を掛けて、その前に朱泥の色をし  
た拙な花活が飾ってある。欄間には額も何もない。ただ真  
鍮の折釘だけが二本光っている。その他には硝子戸の張っ  
た書棚が一つある。けれども中には別にこれと云って目立  
つほどの立派なものも這入っていない。

宗助は銀金具の付いた机の抽出を開けてしきりに中を検  
べ出したが、別に何も見つけ出さないうちに、はたりと締  
めてしまった。それから硯箱の蓋を取って、手紙を書き始  
めた。一本書いて封をして、ちょっと考えたが、

「おい、佐伯のうちは中六番町何番地だったかね」と襖越  
に細君に聞いた。

「二十五番地じゃなくって」と細君は答えたが、宗助が名  
宛を書き終る頃になって、

「手紙じゃ駄目よ、行ってよく話をして来なくっちゃ」と  
付け加えた。

「まあ、駄目までも手紙を一本出しておこう。それでいけ  
なかつたら出掛けるとするさ」と云い切ったが、細君が返事  
をしないので、

「ねえ、おい、それで好いだらう」と念を押した。

細君は悪いとも云い兼ねたと見えて、その上争いもしな  
かった。宗助は郵便を持ったまま、座敷から直ぐ玄関すに出た。  
細君は夫の足音を聞いて始めて、座を立ったが、これは茶  
の間の縁伝えんづたいに玄関に出た。

「ちょっと散歩に行つて来るよ」

「行つていらっしゃい」と細君は微笑しながら答えた。

三十分ばかりして格子こうしががらりと開いたので、御米はま  
た裁縫しごとの手をやめて、縁伝えんづたいに玄関へ出て見ると、帰つた  
と思う宗助の代りに、高等学校の制帽かぶを被つた、弟の小六ころう  
が這入つて来た。袴はかまの裾すそが五六寸しか出ないくらいの長い  
黒羅紗くろらしゃのマントの釦ボタンを外しながら、

「暑い」と云っている。

「だって余あんりだわ。この御天氣にそんな厚いものを着て  
出るなんて」

「何、日が暮れたら寒いだろうと思つて」と小六ころうは云訳いいわけを  
半分しながら、嫂あによめのあと後につ跟ついて、茶の間へ通つたが、縫い  
掛けてある着物へ眼を着けて、

「相変らず精が出来ますね」と云つたなり、長火鉢ながひばちの前へ胡坐あぐら  
をかいた。嫂は裁縫しごとを隅すみの方へ押しやっておいて、小六の  
向むこうへ来て、ちよつと鉄瓶てつびんをおろして炭つを継つぎ始めた。

「御茶ならたくさんです」と小六が云つた。

「厭？」と女学生流に念を押した御米は、

「じゃ御菓子は」と云って笑いかけた。

「あるんですか」と小六が聞いた。

「いいえ、無いの止正直に答えたが、思い出したように、  
「待つてちょうだい、あるかも知れないわ」と云いながら立ち上がる拍子に、横にあった炭取を取り退けて、袋戸棚を開けた。小六は御米の後姿の、羽織が帯で高くなった辺を眺めていた。何を探すのだからなかなか手間が取れそうなので、

「じゃ御菓子も廃しにしましょう。それよりか、今日は兄さんはどうしました」と聞いた。

「兄さんは今ちよいと」と後向のまま答えて、御米はやはり戸棚の中を探している。やがてぱたりと戸を締めて、

「駄目よ。いつの間にか兄さんがみんな食べてしまった」と云いながら、また火鉢の向へ帰って来た。

「じゃ晩に何か御馳走なさい」

「ええしてよ」と柱時計を見ると、もう四時近くである。御米は「四時、五時、六時」と時間を勘定した。小六は黙って嫂の顔を見ていた。彼は実際嫂の御馳走には余り興味を持ち得なかったのである。

「姉さん、兄さんは佐伯へ行ってくれたんですかね」と聞

いた。

「この間から行く行くなって云ってる事は云ってるのよ。だけど、兄さんも朝出て夕方に帰るんでしょ。帰ると草臥くたびれちまって、御湯に行くのも大儀そうなんですもの。だから、そう責めるのも実際御気の毒よ」

「そりゃ兄さんも忙がしいには違なからうけれども、僕もあれがきまらないと気がかりで落ちついて勉強もできないんだから」と云いながら、小六は真鍮しんちゅうの火箸ひばしを取って火鉢ひばちの灰の中へ何かしきりに書き出した。御米はその動く火箸の先を見ていた。

「だから先刻きっき手紙を出しておいたのよ」と慰めるように云った。

「何て」

「そりゃ私わたしもつい見なかったの。けれども、きっとあの相談よ。今に兄さんが帰って来たら聞いて御覧なさい。きっとそうよ」

「もし手紙を出したのなら、その用には違ないでしょう」

「ええ、本当に出したのよ。今兄さんがその手紙を持って、出しに行ったところなの」

小六はこれ以上弁解のような慰藉いしやのような嫂あによめの言葉に耳を借したくなかった。散歩に出る閑ひまがあるなら、手紙の代



りに自分で足を運んでくれたらよさそうなものだと思うと  
余り好い心持でもなかった。座敷へ来て、書棚の中から赤  
い表紙の洋書を出して、方々頁を剥<sup>ページはく</sup>って見ていた。

—  
—

そこに気のつかなかつた宗助<sup>そうすけ</sup>は、町の角<sup>かど</sup>まで来て、切手  
と「敷島」<sup>しきしま</sup>を同じ店で買って、郵便だけはすぐ出したが、そ  
の足でまた同じ道に戻るのが何だか不足だったので、脚<sup>くわ</sup>え  
煙草<sup>たばこ</sup>の煙<sup>けむ</sup>を秋の日に揺<sup>ゆら</sup>つかせながら、ぶらぶら歩いている  
うちに、どこか遠くへ行って、東京と云う所はこんな所だ  
と云う印象をはっきり頭の中へ刻みつけて、そうしてそれ  
を今日の日曜<sup>みやげ</sup>の土産<sup>うち</sup>に家へ帰<sup>ね</sup>って寝ようと云う気になった。  
彼は年来東京の空気を吸って生きている男であるのみなら  
ず、毎日役所<sup>ゆきかよい</sup>の行通には電車を利用して、賑<sup>にぎ</sup>やかな町を二  
度ずつはきつと往<sup>い</sup>ったり来たりする習慣になっているので  
はあるが、身体<sup>からだ</sup>と頭<sup>らく</sup>に楽がないので、いつでも上<sup>うわ</sup>の空<sup>そら</sup>で素  
通りをする事になっているから、自分がその賑やかな町の中  
に活<sup>い</sup>きていると云う自覚は近来とんと起つた事がない。  
もっとも平生<sup>へいぜい</sup>は忙がしさに追われて、別段気にも掛からな  
いが、七日<sup>なのか</sup>に一返<sup>いっぺん</sup>の休日<sup>いっぺん</sup>が来て、心がゆつたりと落ちつけ